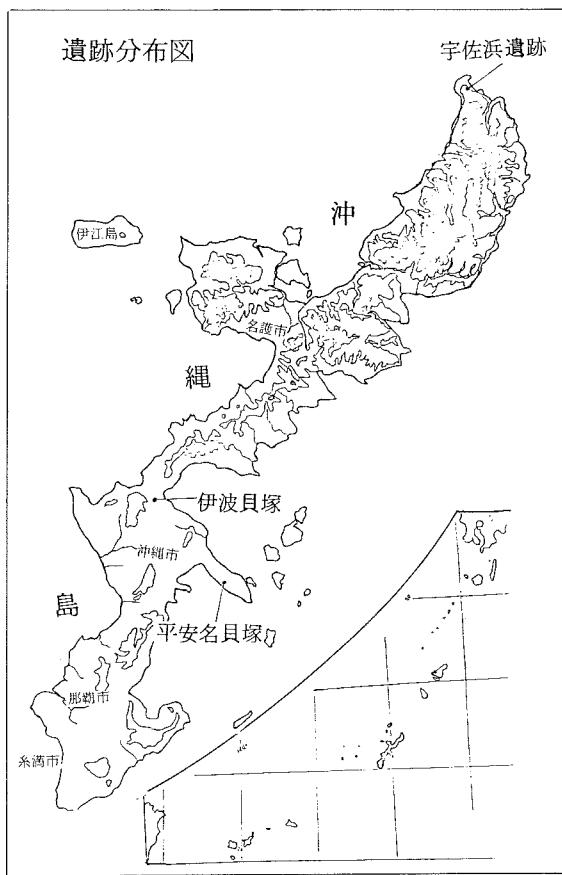


多和田真淳調査収集の考古資料（II）

多和田真淳・知念勇*



宇佐浜遺跡

発見 1954年6月17日

山入端清次、多和田真淳

国頭村辺戸にある沖縄編年中期の遺跡
1968年～71年のあいだに琉球政府文化財保護委員会によって、4回の発掘調査が実施された。沖縄本島の最北端辺戸岬は、高さ20m以上の断崖をなす、本遺跡はこの断崖直上、標高約50mの地にあり、南から北へゆるやかに下降する傾斜地にある。

発掘の結果、約20cmの表土層下に褐色土の第Ⅱ層約15cmと暗褐色土の第Ⅲ層15～20cmからなるが、Ⅱ層は時期差を認めがたく基本的には、単一文化層と考えられる。

遺構は、一辺2～4mの周間に幅約80cmで帯状に挙大の碎石をめぐらした方形の石組遺構が数基検出されている。内部には炉址とみられる焼土部分も確認されていることから石組住居址と考えられている。

出土遺物は土器と石器がある。石器には磨製石斧の他石皿と、磨石が多く出土している。土器は無文化の進んだ壺と甕があるが、とくに口縁部が肥厚し断面が三角状を呈する壺形の宇佐浜式土器が主体を占め、本遺跡がその標識遺跡となっている。

これらの土器や石組遺構の形態が、奄美大島宇宿貝塚発見の宇宿上層式と石組遺構の形態等が類似することから、両地域が同一文化圏であると考えられるようになった。

本遺跡北東崖下の海岸砂丘には沖縄編年後期に属する宇佐浜B貝塚がある。また南西に隣接してC地点、南東約200mにB、E地点北方約100mにF地点の中興遺跡が点在する。

開平地に立地すること、貝類や獸魚骨類が少くないことなどは中期遺跡の特徴である。

1972年5月15日、国の史跡に指定された。

今回紹介する遺物は土器と石器である。

(★たわだ しんじゅん 那覇市史編集委員)

(★★ちねん いさむ 県立博物館主任学芸員)

土 器

宇佐浜式土器

採集土器はすべて宇佐浜式に属するものである。口縁部は第1図1～7と第2図1の8個あるが、いずれも壺形で鉢形はなく、無文化が進み有文は第1図1～3第2図1の4個のみである。

第1図1と2は同一個体とみられるもので口縁部断面が三角状を呈する壺形の宇佐浜式土器である。口縁部には鞍状の凸帯文が施され、その直下の頸部から肩部にかけて3本の沈線文が施されている。肩部にも横位の沈線文が一本みられる。

鞍状凸帯文は、対象に向い合って、対をなしていたとみられ、その中間の頸部に3本の沈線が配されていたと推察できる。沈線は先端の鋭利な工具によったとみられる。

黒褐色を呈し、表面調整がよく手ざわりがなめらかで、宇佐浜式特有のザラついた感じがない。口径10.2cm、器厚7mm、胎土には砂粒と石英粒が混入。

同図3は口縁部断面が三角状の壺形土器である。口唇部に単籠工具による幅3mmの横捺刻文が施されているが、胴部は無文である。器面調整が良く、手ざわりはなめらかである。

褐色で、胎土には白色の石灰質混入物があり、その抜け痕がポーラスな面となっている。器厚7mm口径不明。

同図4は口縁部断面が三角状を呈する無文壺形土器、器面調整良好。茶褐色を呈し、胎土には砂粒と石英が混入、器厚は8～9mm、同図1～3に比して焼成が弱く、脆弱で厚手の土器である。

同図5は口縁部断面が三角状の無文壺形土器・器面は剥離がめだちザラついている。石灰質砂粒が少量混入するが、同図1～4に比して、混入物は少なく、胎土は緻密である器色は口唇部の一部が赤褐色で他は黄褐色となる。焼成良好、器厚8mm

同図6は、口縁部の肥厚部が広くなるため断面形が蛇頭状となる、無文壺形土器、表面調整が良く手ざわりがなめらかである。器色は胎土の中央部が黒色であるが表裏面ともあざやかな赤褐色となる。口径6mm薄手、焼成は弱く脆弱な土器、砂粒状物質混入。

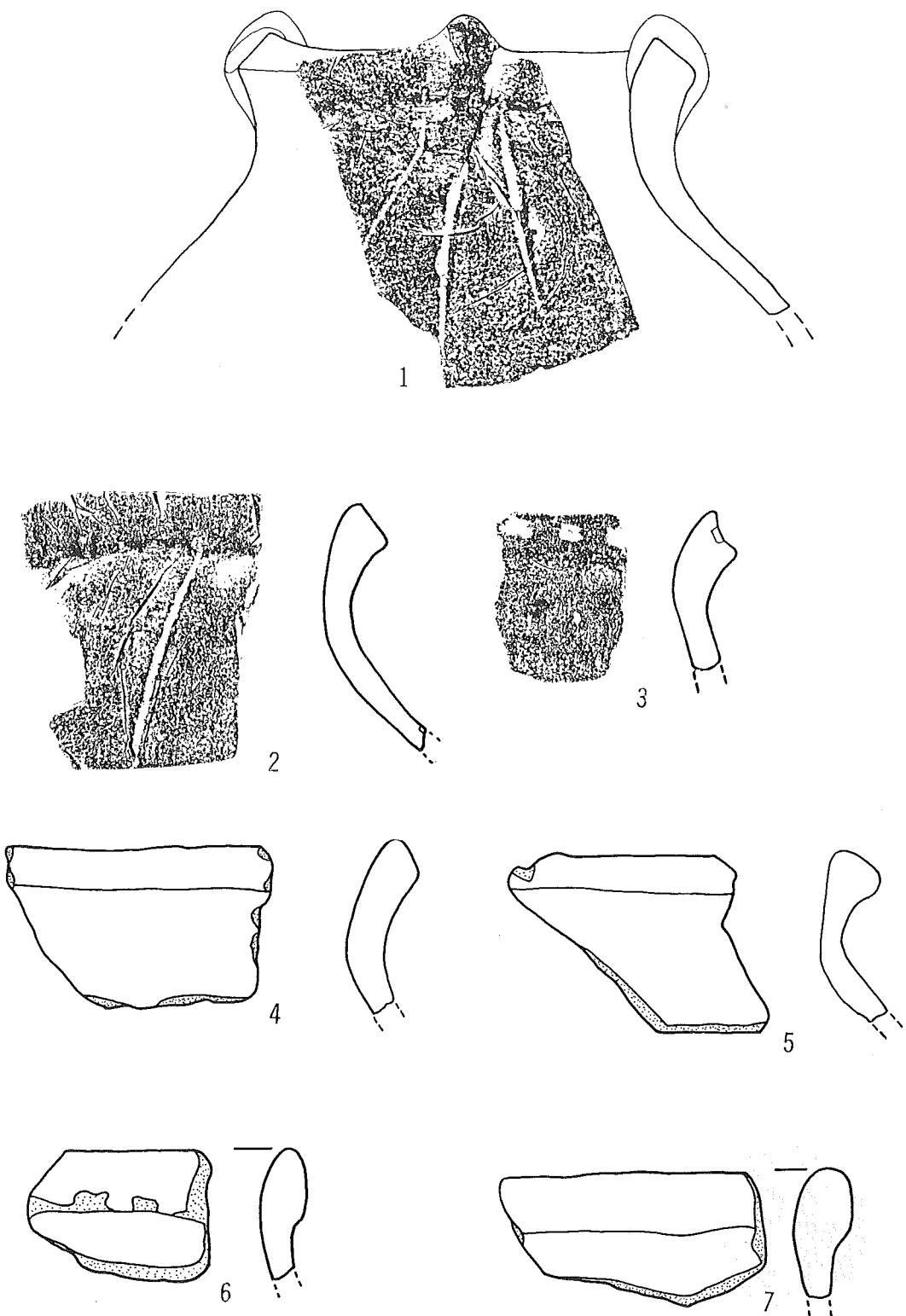
同図7は口径推算10.5cm、口縁部の断面がカマボコ状を呈する無文壺形とみられる。器面調整、焼成ともきわめて良好で硬質な土器。器厚6mm、器色黄褐色、胎土には雲母状の光沢を有する物質と石英小量が混入。

第2図1は、口縁断面が三角状をなす有文壺形土器、口縁部下1.5cmとさらに下へ1.5cmのところにそれぞれ横位と縦位のミミズばれ状文があり、その上下、左右には細い刺突文が施されている。表面調整も良く剝利はみられない。石英粒と雲母が混入するため手ざわりはザラつく感がある。器色は黒色及至茶褐色、焼成は機分弱い、器厚8～9mmと厚手。

同図3は、胴部であるが上端が外反するため、頸部とみられる。上端部から4.5cmのところでカーヴする単籠工具による横位の爪形文が1本と、その上部右よりに縦位の1.2cm間隔をもって、縦位の爪形文が2本配されている。焼成、胎土等の特徴は上述2と同じである。

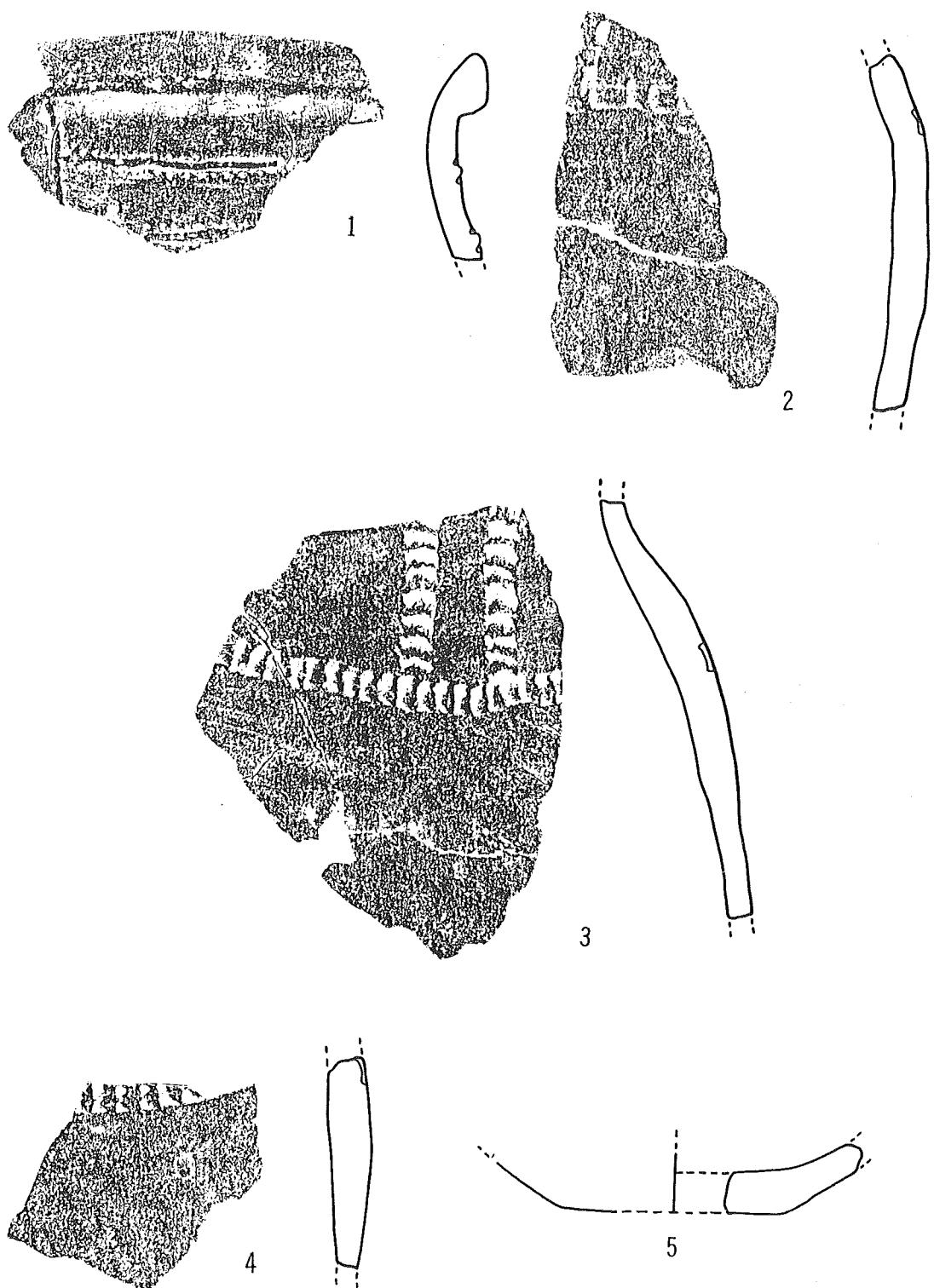
同図4は同図3と同一個体とみられるもので、上端に爪形文を有する。

同図5は、唯一の底部資料である。底径推算5cmの平底で、器色、胎土等は同図2と3に近い。底



第1図 宇佐浜遺跡・土器

0 5cm



第2図 宇佐浜遺跡・土器

0 5cm

部から胴部への立上りがゆるやかなことから大型の器形が想定される。底部厚1cm、胴部への移行部8mm。

石 器

石 斧

石斧は第3図1～5の5個である。これら5個のうち、刃部を完全に残すのは同図3の1個のみで、他はいずれも刃部を欠くもので石斧としての用途は果さなくなつて、遺棄されたかもしくは、敲石等に転用されたとみられるものである。

同図1は蛤刃の全面磨製石斧であったとみられるが頭部の一部と刃部が欠失している。最大長11.1cm、最大幅3.2cm、最大厚3.2cm、重量310g、石質斑レイ岩。

同図2は一方の面はよく研磨されているが他面は素材に凹凸が多かったらしく、研磨が不徹底である。片刃状の石斧で刃部は一部を残し、他は欠失している。同図右側図にみられるように、頭部から刃部にかけて、作成時のものとみられる陵線が残っており、屋根形的となっている。最大長10.2cm、最大幅5.4cm、最大厚1.7cm、重量195g偏平、石器斑レイ岩。

同図3は青灰色の頭部を欠く両刃石斧。全面入念に研磨が施されている。作成時のものとみられる研磨痕が刃部と平行に、長軸と直交するかたちで認められる。図の右側図に示したように、刃部左端から途中までは、刃部と直行する方向で使用痕が認められる。刃部は先端部が研磨されており、刃先は幅約1.5mmの面取りがなされ銳利さを失なっている蛤刃状の石斧。図に波線で示したように陵線がみられる。最大長5.7cm、最大幅4.3cm、最大厚1.8cm、重量85g、石質砂岩。

同図4は全面磨製の片刃石斧。刃部は大半が欠損、残存部も磨耗が著しく、銳利さを失なっている。頭部の一端から敲打によるとみられる剝離痕がみられる。最大長7.2cm、最大幅3.3cm、最大厚1.8cm、重量75g、石質斑レイ岩。

同図5は頭部近くと側面を中心と局部的に研磨がみられるが自然面を多く残している。もともとは石斧であったとみられるが現況でみるとかぎり、石斧としてよりも敲石として再使用されたとみられる。横断面図でわかるように左側に反っている。最大長9.8cm、最大幅4.8cm、最大厚2.3cm、重量195g、石質砂岩。

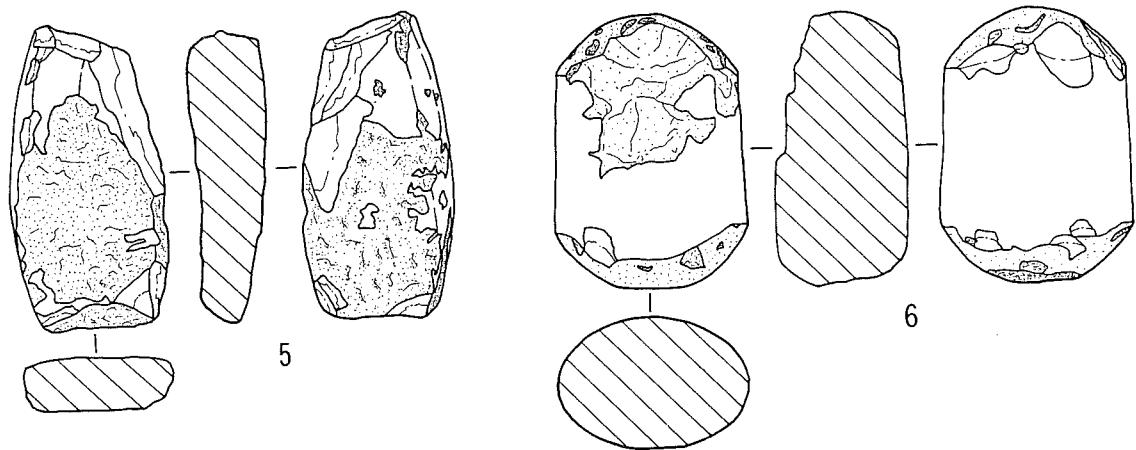
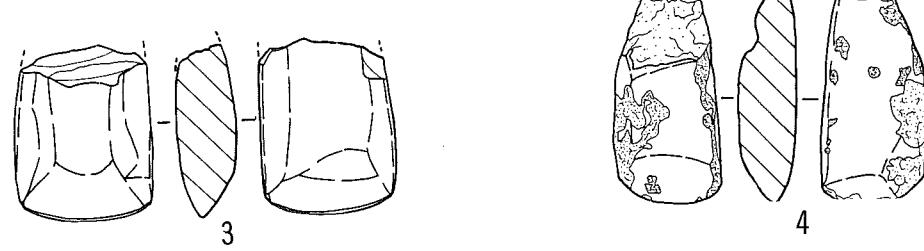
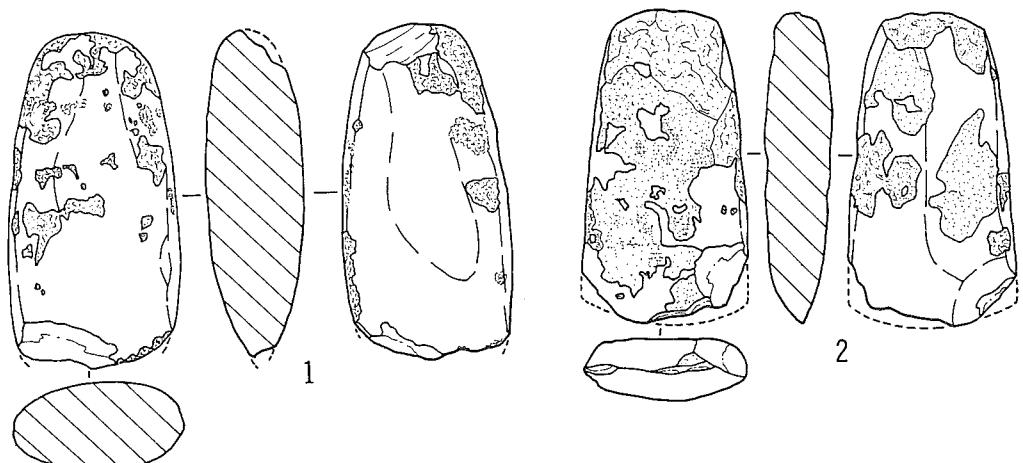
同図6は柱状の敲石で敲打面の上端と下端をのぞき、全面入念に研磨が施されている。上端と下端は半月状に研磨して整形されているが使用による敲打痕が認められる。平面図の右側は強打による欠損がみられる。最大長8.9cm、最大幅6.2cm、最大厚4.1cm、重量449g、石質斑レイ岩。

伊波貝塚

1919年、鳥居龍藏発見

沖縄本島中部の東海岸金武湾に面した石川市宇伊波標高約90cmの琉球石灰岩台地北東崖下にある貝塚は岩かけ部から市街地へ向うゆるやかな傾斜地に立地する。その範囲は、東西160m南北20～25mの範囲内に貝層が点在する。

1919年鳥居博士によって発見され「石川村チヌヒンチャ貝塚」として、中央の学会誌に紹介さ



第3図 宇佐浜遺跡・石器

0 10cm

れた。

1920年（大正9）大山柏氏によって発掘調査がなされ、1922年（大正11）報告書が刊行された。

それによると、多種、多量の貝類、魚骨、シゴン等の獸魚骨に混じって、人工遺物である土器、石器、貝製品などが発見された。

土器は伊波式土器が主体で、荻堂式等があるが少くない。1972年5月15日国の史跡に指定された。

土 器

伊波式土器

土器は形式不明の小破片と奄美系をのぞけばすべて伊波式である。

第1種は伊波式の特徴である口頸部の文様が上段、中段、下段の3段に分れるが、上段と下段に叉状工具による平行点刻文がそれぞれ2列施され、中段が無文となり胴部から口縁部にかけて外反する深鉢型平底土器である。

第4図1～5、第5図1～6、第6図1～4、第7図1の合計11個で、第1類が主体をなす。

第4図1は口径21cmの比較的大型の土器である。口縁は山形の波状をなし、口頸部上段の文様は、波状口縁に平行して施されるため、文様も波状をなす。器色は外面黒色、内面は赤褐色を呈する。内外面ともよく器面調整が行き届きハケ目状の調整痕をよく残す。

現存部下端の割れ目は、輪積みのつぎ目が明瞭に残っている。器厚7mm。

同図2と3は、表裏面とも赤褐色を呈するもので、口縁部が直線的となるため、大型の器形が想定できる。胎土にはいずれも石英と石灰質砂粒が含まれる。表面調整は1ほどは徹底していない。器厚6mmで薄手で波状口縁、口唇部は無文。

同図4は口頸部上段の点刻文は1列、波状口縁で口唇部が無文となるのは前述2、3と同様であるが表裏面とも調整面はハゲ落ちておりザラついた感じがする。表面黒色で内面は赤褐色、器厚6mm。

同図5は口縁部で小片、胎土等のその他の特徴はすべて、2、3と同様。

第5図1は、第4図1とともに口頸の推算できる資料である。口頸推算15cmで伊波式としては中型である。ゆるやかな波状口縁をなし、口唇部は無文、器面調整がよく、表面黒色で裏面は赤褐色となる。胎土には石英粒が混入、器厚7mm。

同図2は口縁部の山形が急で頸部中段の無文部は広く、雄大な器形が想定される。表裏面ともハケ目状の調整痕が明瞭に残っている。口唇部は無文、下端部の割れ目は輪積み痕を残している。表面黒色で裏面は褐色である。胎土には石英粒が混入、器厚8mm。

同図3は胴部破片表面黒色で石英を多量混入。器厚8mm。

同図4は胴部破片は表面黒色で石英を多量に混入、器厚8mm。

同図5は口頸部とみられる破片で表裏面とも赤褐色を呈する。石英粒を多量に混入、器厚7mm。

同図6は口頸部の文様が上下段とも1列で山形の波状口縁をなす。波頂部から口頸部上下段と同

様の点刻文が縦に1列施されており、口唇部には単範工具による点刻文がみられる。器面は部分的に黒色となるが他は明るい赤褐色を呈する。器面調整によるハケ目状痕が明瞭に残っている。石英の混入は少くない、器厚5mmと薄手の土器。

第6図1は口頸部近くの破片、口頸部上段と下段の文様間が2cmとせまい、表裏面とも赤褐色で石英粒が多く混入する。器厚7mm。

第7図1は、口頸部上端と下端に点刻文が一列施されるもので、波状口縁をなすが波頂部から同様の点刻文が縦に一列施されるもので、口唇部に単範工具状の連点文が施されている。器厚6mmと薄手となることや文様等の特徴は6に類似する。石英混入。

第2類

本類は第1類の点刻文が短沈線となるもので、他の特徴は1類に類似する。第4図6と第6図2のみで少くない。

第3類

本類は口頸部の上段と下段に一組または二組の点刻文が施され中段を斜沈線や綾杉状文で埋めるものである。

第6図7、第7図1、3、4、5、6、8の7個が本類に属する。

第6図7は小破片のため文様の展開や器形は不明、沈線は細かく表裏面とも黒色を呈し両面とも器面調整によるハケ目状痕を残す。石英混入、器厚5mm。

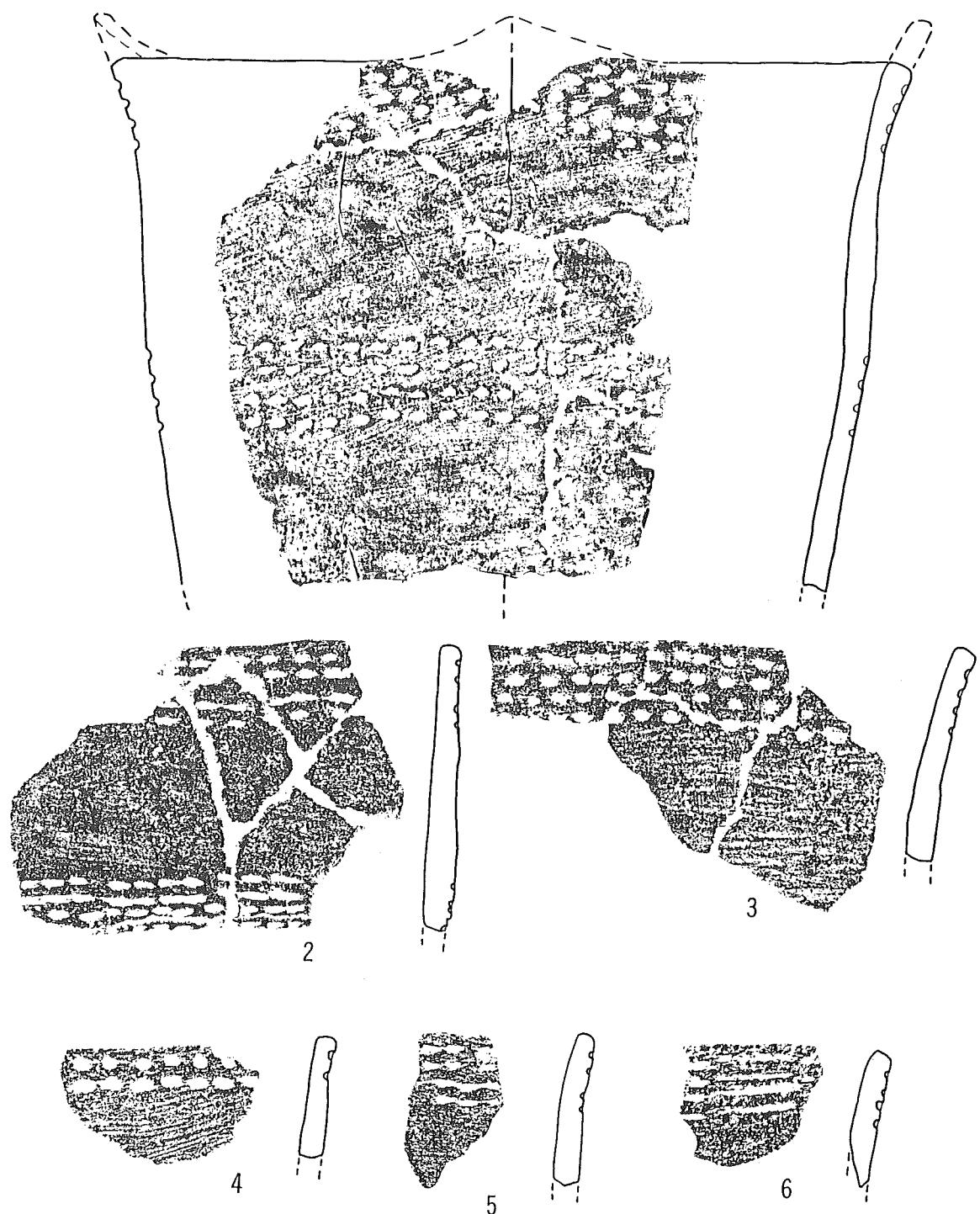
同図3は口頸部とみられる破片、叉状工具による平行線文が斜状に方向をかえて施されその下端に一列横位の連点文が配されている表面は黒褐色で裏面は黒色である。石英混入、器厚7mm。

同図4は口頸部上段に横位の点刻文が一列に施され、その下に縦位の斜沈線文が方向を異にして全面に施されている。これらの文様は細沈線であり、いわゆる奄美的感じのする文様である。口径推算12.5cm、口縁部波頂部は突起状をなす。口唇部には、波頂部とその左右に5cm以内で短沈線文が施される。

全面黒色で内面は器面調整時のハケ目状痕がみられるが外面は表面剥落し、ザラついた感じである。多量の石英粒混入、焼成が弱く脆弱な土器である。器厚6mm。

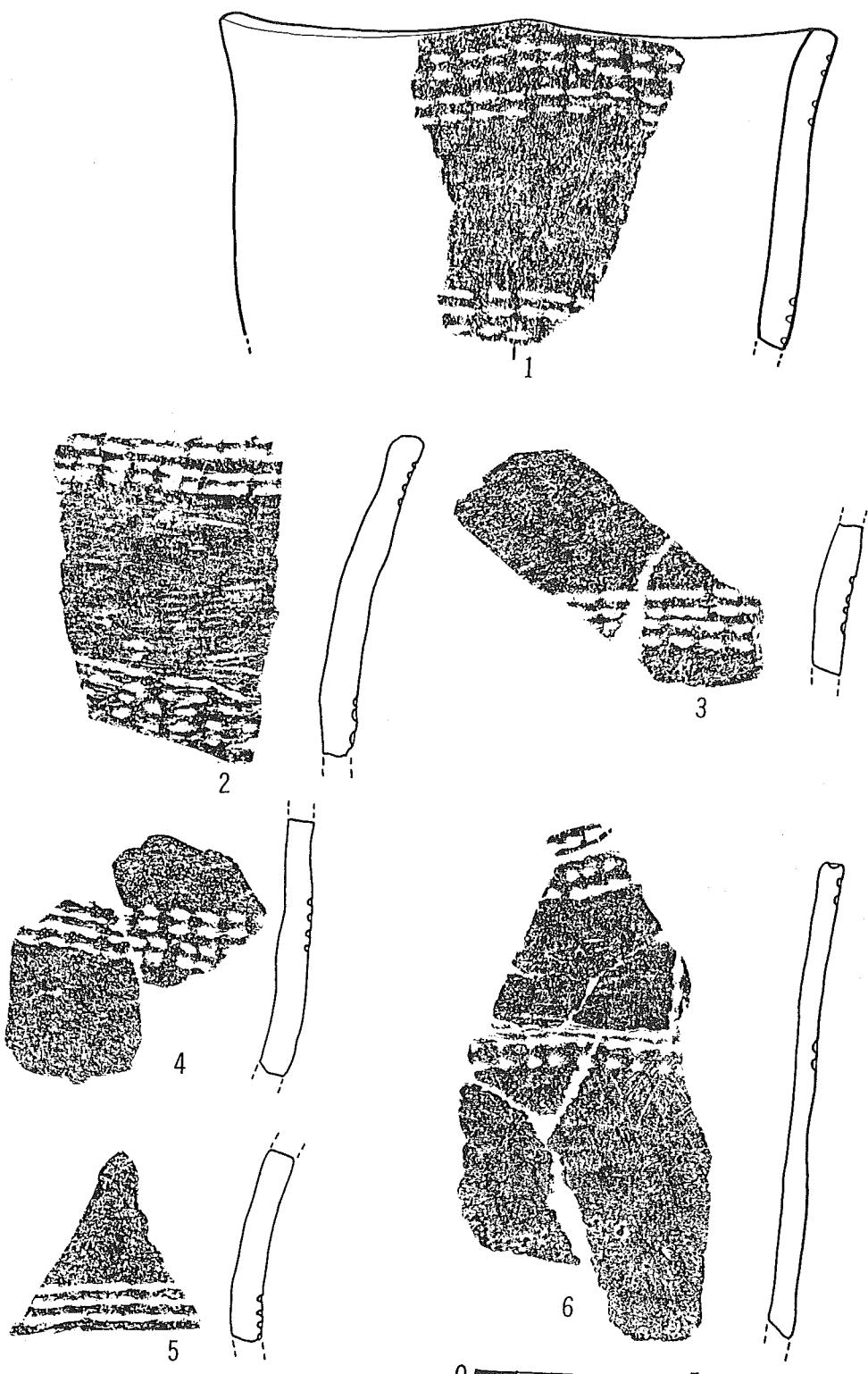
第7図6は口縁部の山形が簡略化された、段差をなすもので、口唇部に一条の刺突文が施されている。口頸部上段に横位の2条点刻文が施されその下に長さ1.5cmで太目の平行線が綾杉状に施されている。外面は黒褐色、内面は赤褐色となる。口縁部は外反するが胴部にかけてふくらみを有するとみられ、文様の等の特徴から荻堂的な要素を有する。伊波式から移行期のものと考えられる。石英混入、器厚7mm。

同図5、8は口頸部とみられる破片で、5は叉状工具によるとみられる斜沈線文で、8は単ベラ工具による綾杉状文である。器厚は5が7mm、6が6mm、両方とも黒味をおびた褐色である。いずれも石英混入。

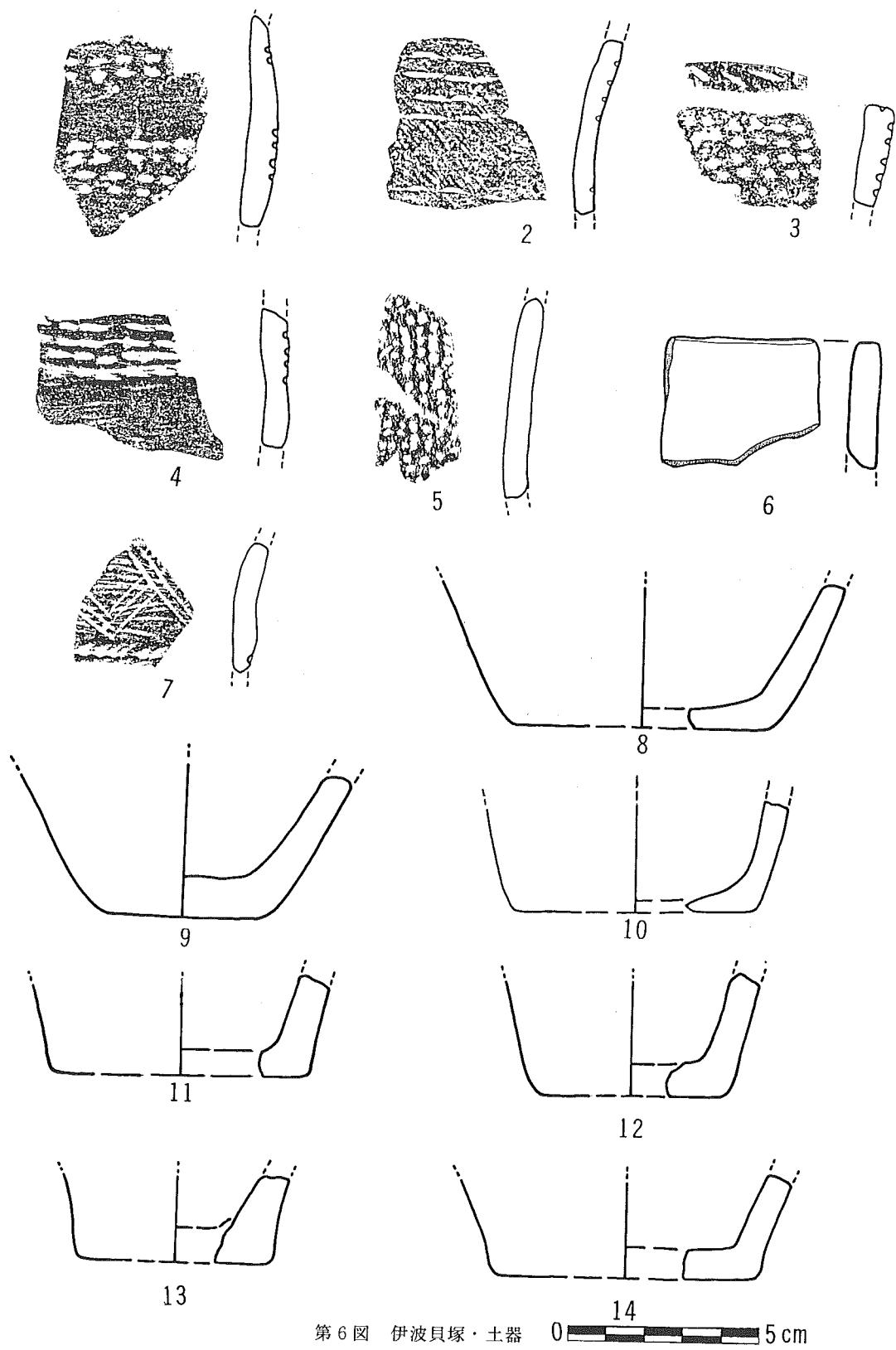


第4図 伊波貝塚・土器

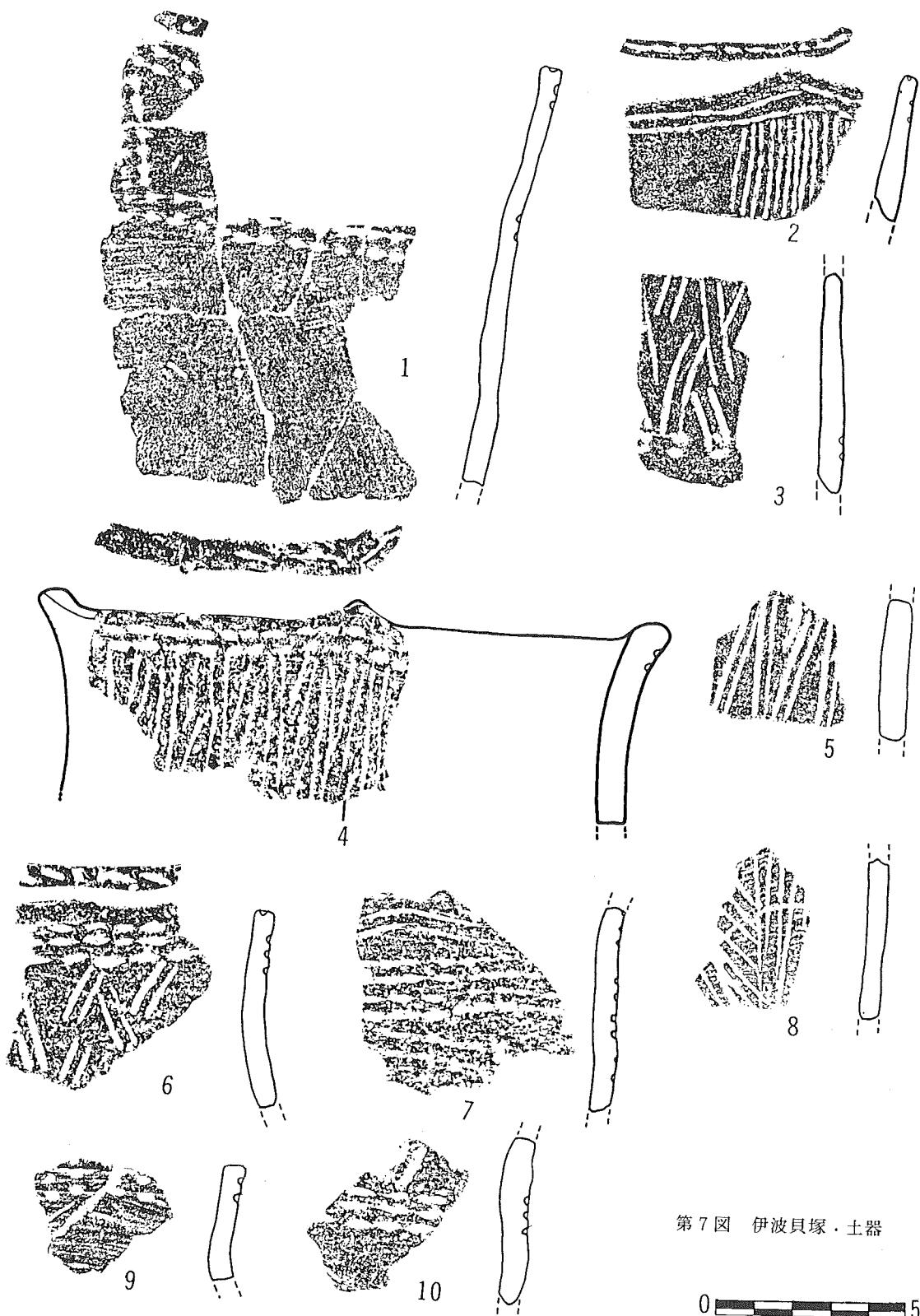
0 5 cm



第5図 伊波貝塚・土器



第6図 伊波貝塚・土器 0 5 cm



第7図 伊波貝塚・土器

0 5cm

その他の土器

第6図5と第7図2は、いわゆる奄美系とみられる土器、両方とも先端の鋭い单箇工具による刺突文である。前者は石英が少量混入する赤褐色の土器で、器厚7mm、器形不明。後者は、波状口縁をなすこと、文様の配置等からみて、伊波式と共通する点が多い。胎土に石英の混入がみられる。胎土のこまやかなことや文様等の特徴から、いわゆる奄美的な土器である。全体的に赤褐色で、器厚7mm。

第4図6、第6図7、第7図6、7、9、10は口縁部がわずかに外反し、胴部にふくらみを有する深鉢形の器形とみられるもので、文様等から荻堂的な特徴を有する土器である。器厚は平均7～8mmで厚目である。

第6図6は唯一の無文口縁土器である。表裏面とも赤褐色を呈し、石英を多く混入、器厚7mm、器形不明。

底部は第6図8～14の7個ある。8は底径6.8cm、両面ともよく表面調整されている黒色の土器底部の厚さ6mmで薄手である。石英混入。9は底径4.7cm、表裏面の調整が良く残っている。器色は表面黒褐色で、裏面赤褐色、石英粒が多量に混入、底部厚8mm。

同図10は底径推算7.5cm、表裏とも赤褐、底部厚5mmと薄い。石英片混入。

同図11は底径推算7cm、表面黒色、内面赤褐色、底部厚不明、胴部への立上りが幾分外反をなす点は他の土器とは異なる点である。石英粒の混入は少くない。

同図14は底径推算7cm、表裏面とも赤褐色、石英が多量に混入、底部の厚さ8mm。

骨製品

ジュゴンの助骨とみられるもので、図の上端部に抉り入状のけずり痕がみられるものである。抉りの中心部とみられる部分から欠失している。他には加工痕はみられない。用途不明の骨器片である。最大長14cm、最大幅2.6cm、最大厚1.6cm、重量65g。

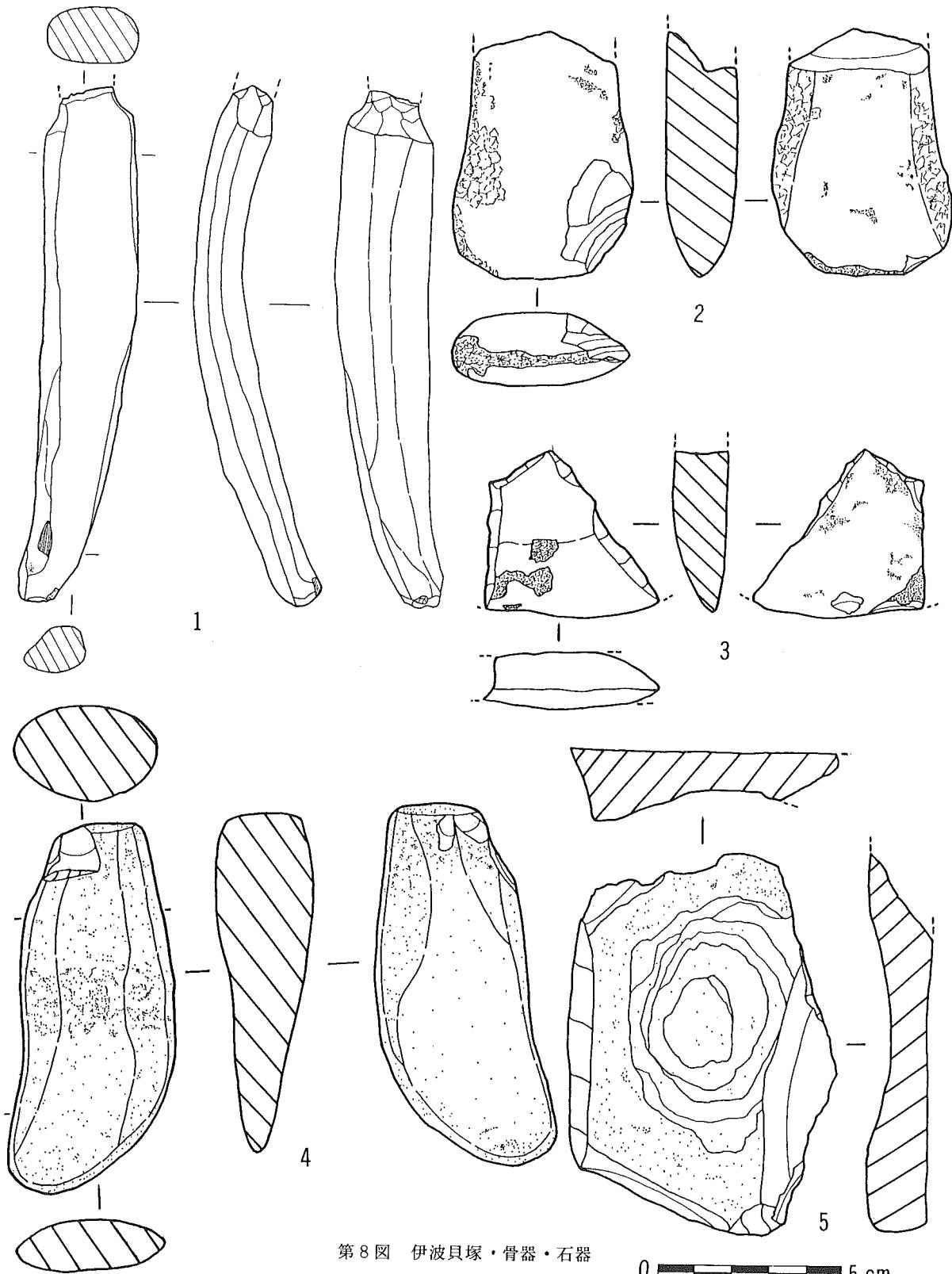
石 器

第8図2は全面研磨の石斧であるが、刃部の円味がなくなる程磨耗しており石斧としては役割を果さないものである。刃の部分は幅広く、頭部へ向けて幅がせばまるまさかり形をなす。頭部が欠失し、刃部は敲打によるとみられる剥利痕がみられるため、敲石に転用して使用されたとみられる。最大幅4.5cm、最大厚1.7cm、重量110g、石質斑レイ岩。

同図2は図の下端部に石斧状の刃部が作り出され、全面研磨が施されている。縦断面図でみると片刃状となるが破片のため全体形はうかがえない。石斧とは異なった形状をなす。最大厚1.5cm、重量45g、石質砂岩。

同図4は刃先状をなした砂岩（ニービのシン）で全面研磨によって整形されたとみられる。図の上端はフラットに整形され、一部打痕による欠損がみられる。形状的には敲石的な用途が考えられるが断定はしがたい。最大長10cm、最大幅4.2cm、最大厚2.2cm、重量130g。

同図5は一面に敲打によるとみられるクボミがみられる。他の面は平坦である。図の上部と右側



第8図 伊波貝塚・骨器・石器

0 5 cm

が欠失する。クボミは長径 1.8 cm、短形 4.5 cm の橢円状をなす、重量 9g、石質片状砂岩、厚さ 2 cm の均一な版状をなす。

平安名貝塚

本遺跡は前回(1)で報告を行なったが、報告もれがあるので、追加して報告する。

今回報告を行う土器はすべて有文の口縁部で10点ある。

このうち、伊波式が第9図1～7で最も多く、荻堂式が3点である。このうち文様は大山式類似のもの1点あるが、器形からみて、荻堂式に含めることにしたい。移行形式のものと考えられる。

同図1～5は伊波貝塚において、第1類に分類したものである。1、2、4は口頸部上端に一条の点刻が施されるもので口唇部にはそれぞれ点刻文が施される。いずれも外反する波状口縁である。器厚は6～7mm、器色は黒褐色ないし赤褐色を呈する。石英混入。

同図6は口頸部上段に单箇工具による連点文が一列施され、その下に綾杉状の斜沈線文が施されている。黒色を呈し、器厚6mm。

同図7は口径推算12cm、口頸部の文様が6段に区分できるものである。上から一段目は横位の短沈線文、2段目は綾杉状文、3段目は横位の短沈線文、4段目は綾杉状文、5段目は横位の短沈線文が2列、6段目は鋸歯状文が配される。図の右端は上一段目の短沈線文が縦位にあり、上から2段目と4段目の綾杉状文を閉うかたちとなっている。

全面黒色で、石英混入、器厚7mmで外反を呈する。焼成弱く脆弱な土器。

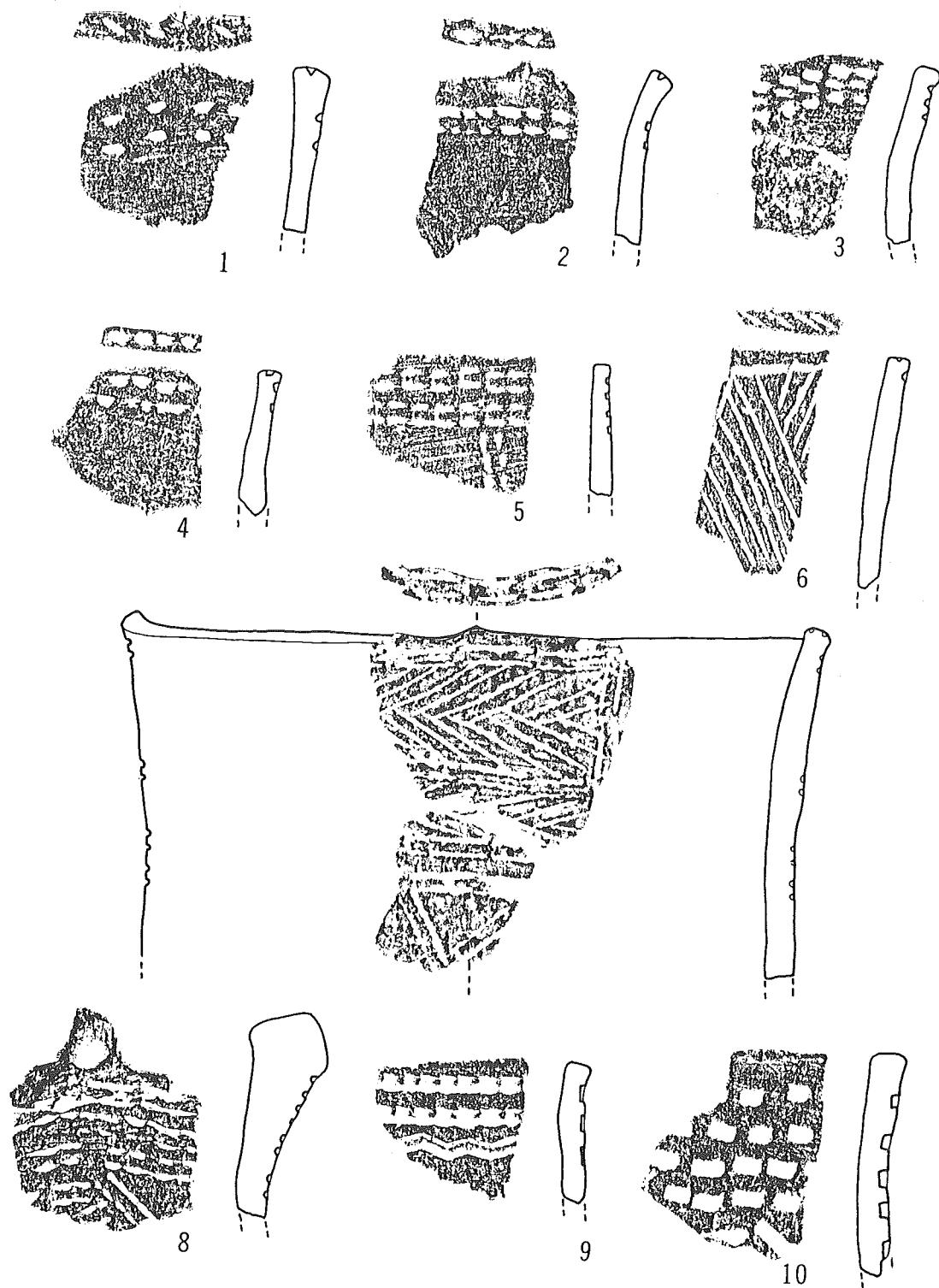
文様は綾杉状文以外はすべて叉状工具によるもので、平行線文である。口唇部にも平行短沈線文がみられる。

同図8は荻堂式の特徴を有する口縁部の突起部が肥厚し、叉状工具による横位の平行連点文が口頸部上段に2列とその下に同様の平行連点鋸歯状文が配される。表裏面とも赤褐色を呈し、石英が多く混入するもので器厚8mm。

同図9は单箇工具による横位の押引文が口頸部上段に2列とその下に鋸歯状の押引文が1列配されている。器色は赤褐色、口縁部が幾分しまり、胴部においてふくらみをもつ器形とみられ、荻堂式とみなされるものである。石英混入。器厚7mm。

同図10は单箇工具による横掠刻文が4列、口頸部上段に施され、その下に单箇工具の幅1.2cmの鋸状文が配されるものである。器形は口縁部がしまり、胴部がふくらむ、荻堂式とみなされる土器である。しかし文様には大山式的要素もあり、移行期の形式と考えられる。表裏面とも赤褐色、石英粒が小量混入、器厚8mmでやや厚手の土器。

遺物の実測は、沖縄国際大学4年次大城剛君が担当し、石質の同定は当館主任学芸員大城逸朗にお願いした感謝申し上げます。

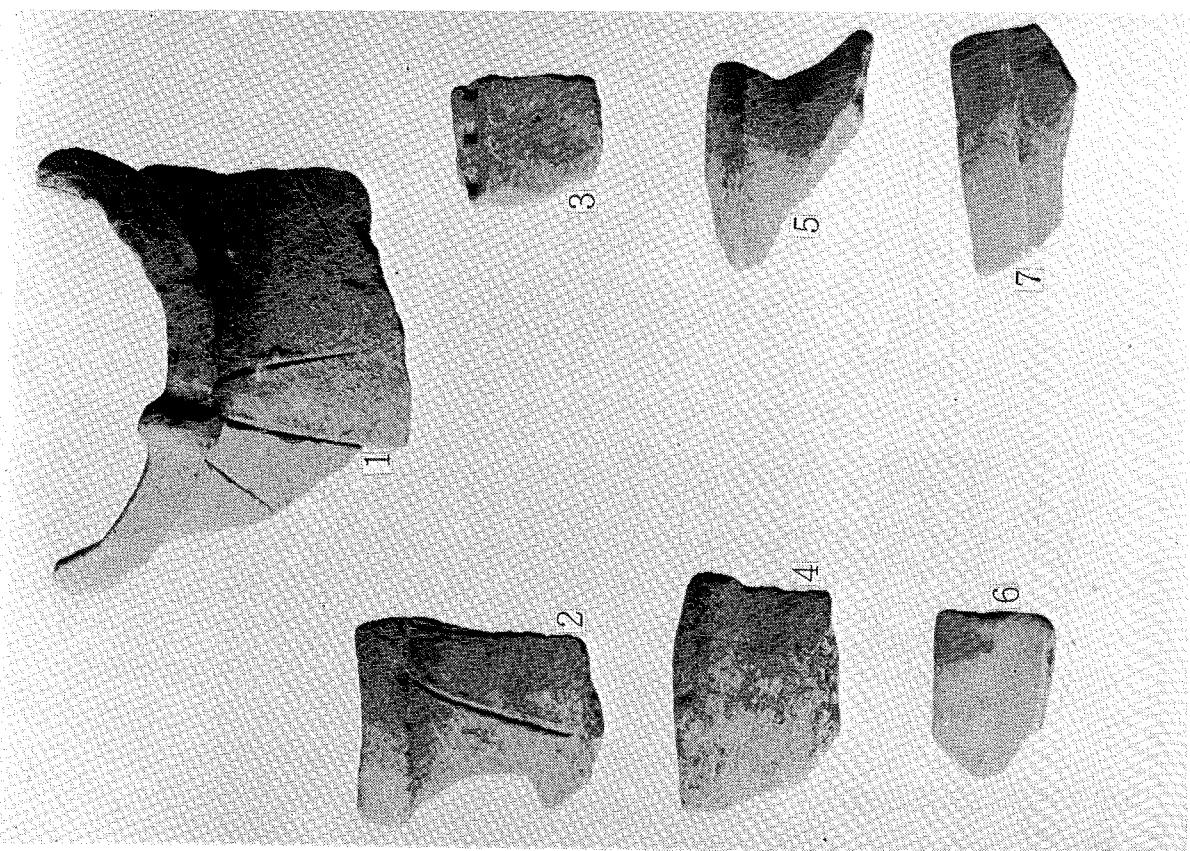
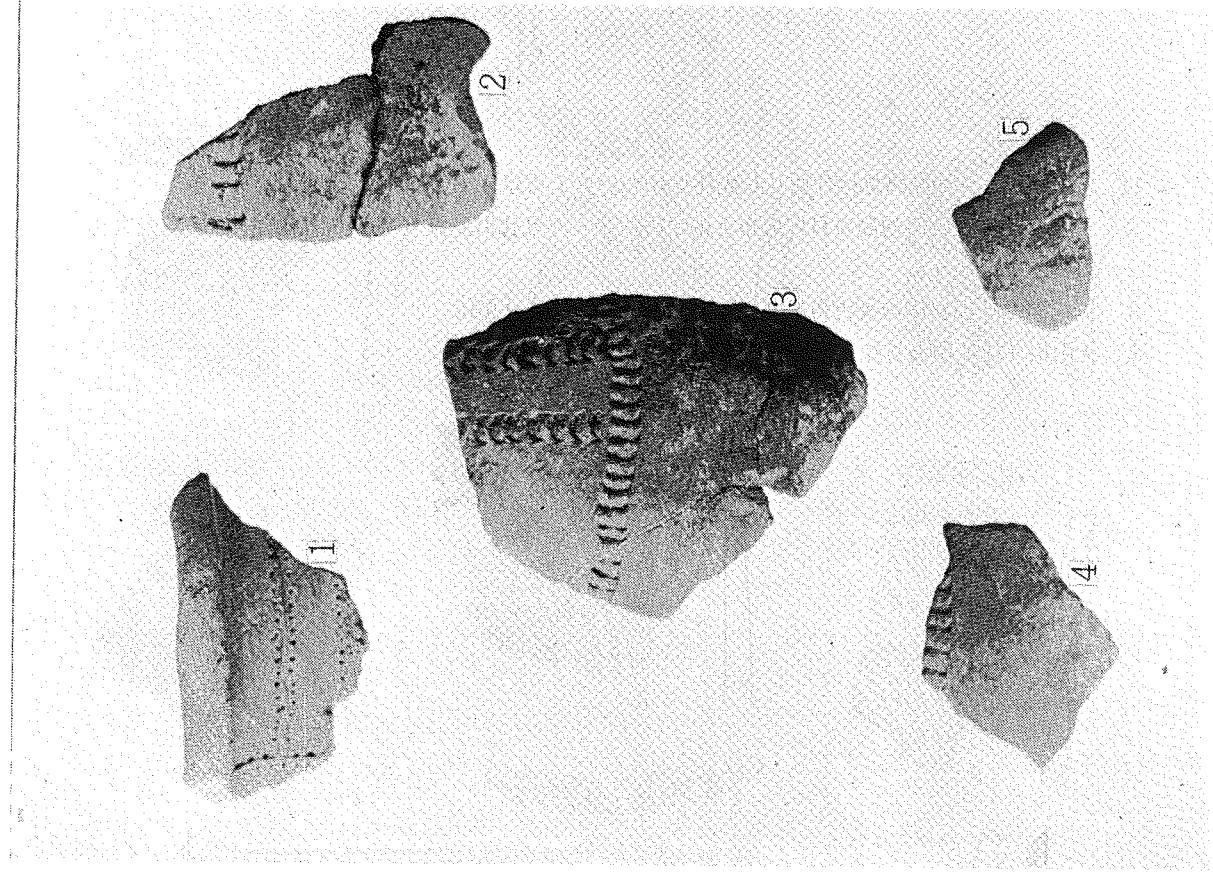


第9図 平安名貝塚・土器

0 5cm

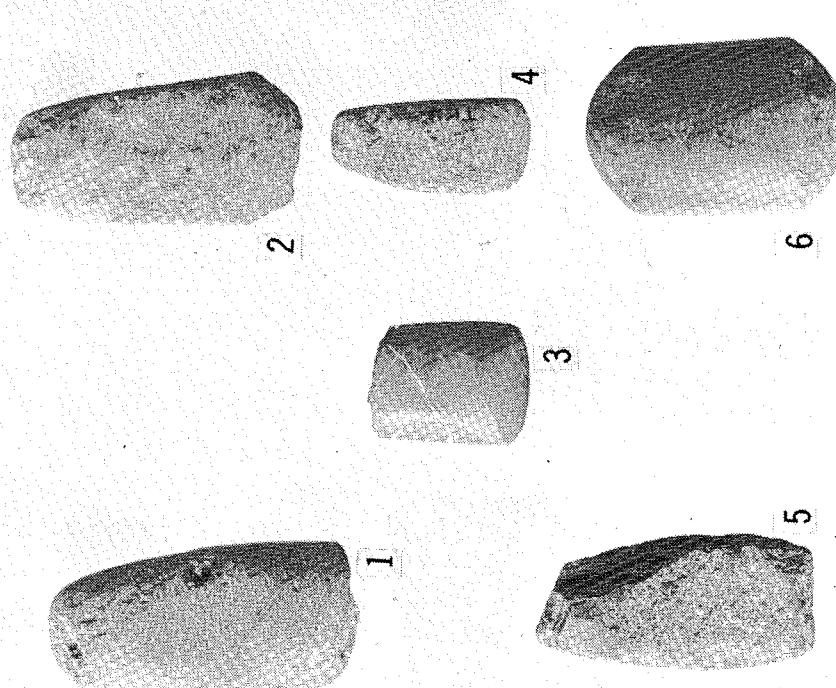
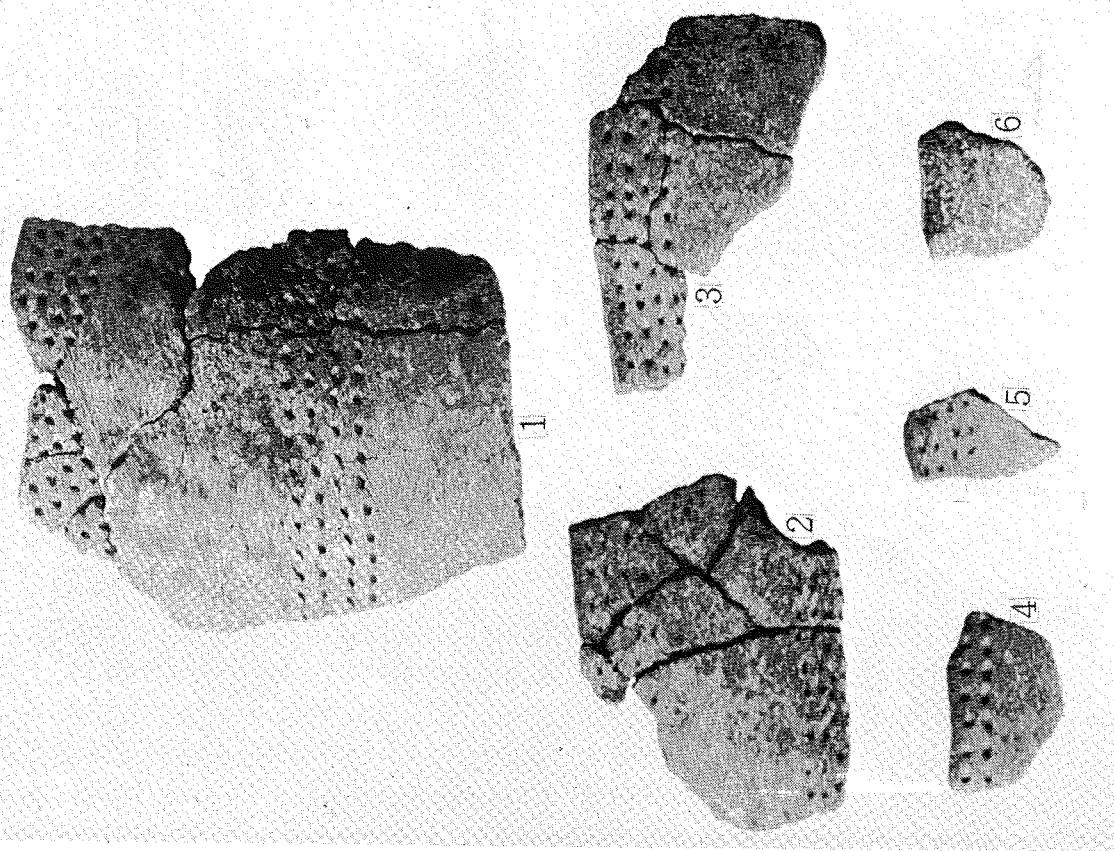
参考文献

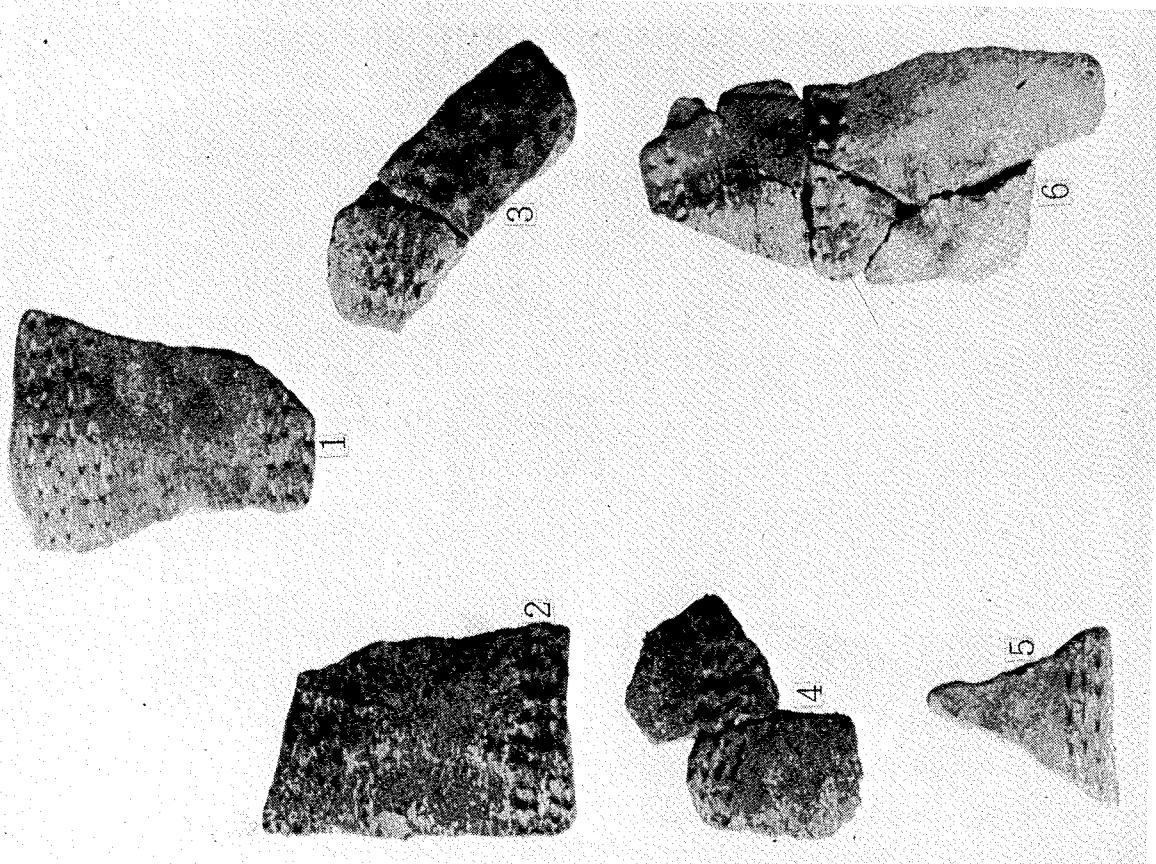
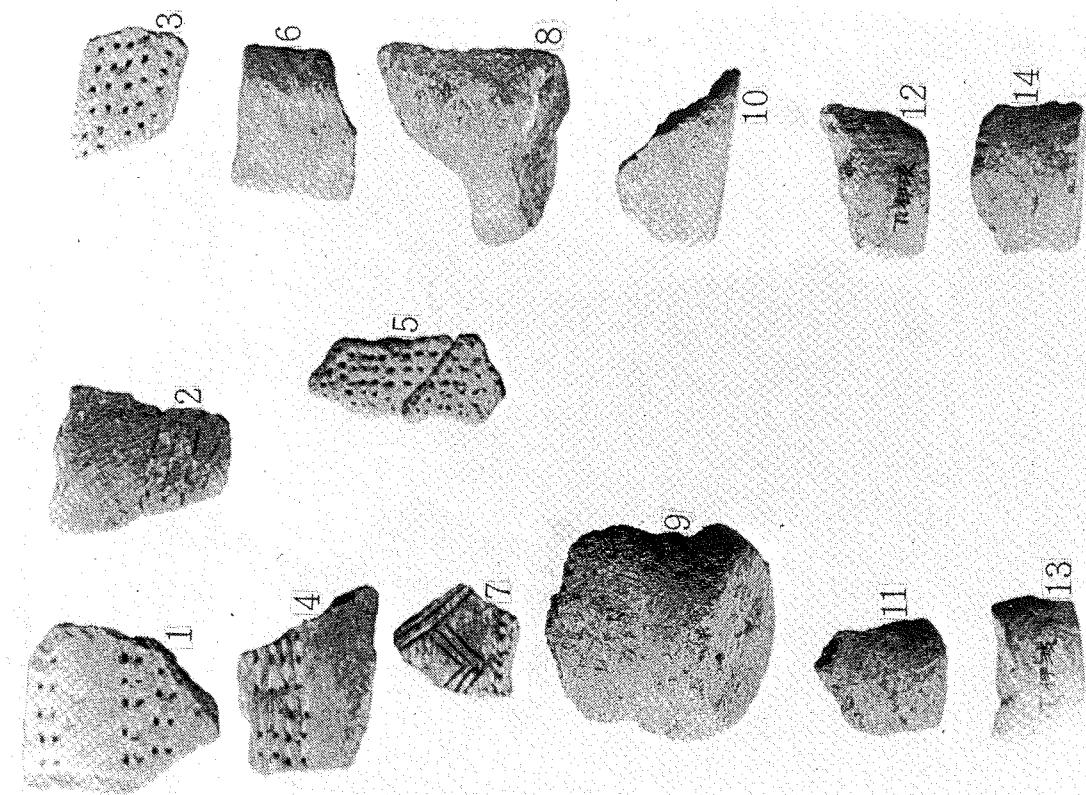
1. 鳥居龍藏 「沖縄諸島に住居せし先住民について」東京人類学会雑誌第20巻 227号
2. 多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」「文化財要覧（1956年版）」琉球政府文化財保護委員会
3. 高宮廣衛「那覇市の考古資料」那覇市史第1巻1号、1968
4. 大山柏「琉球伊波貝発掘報告」東京大学 1922



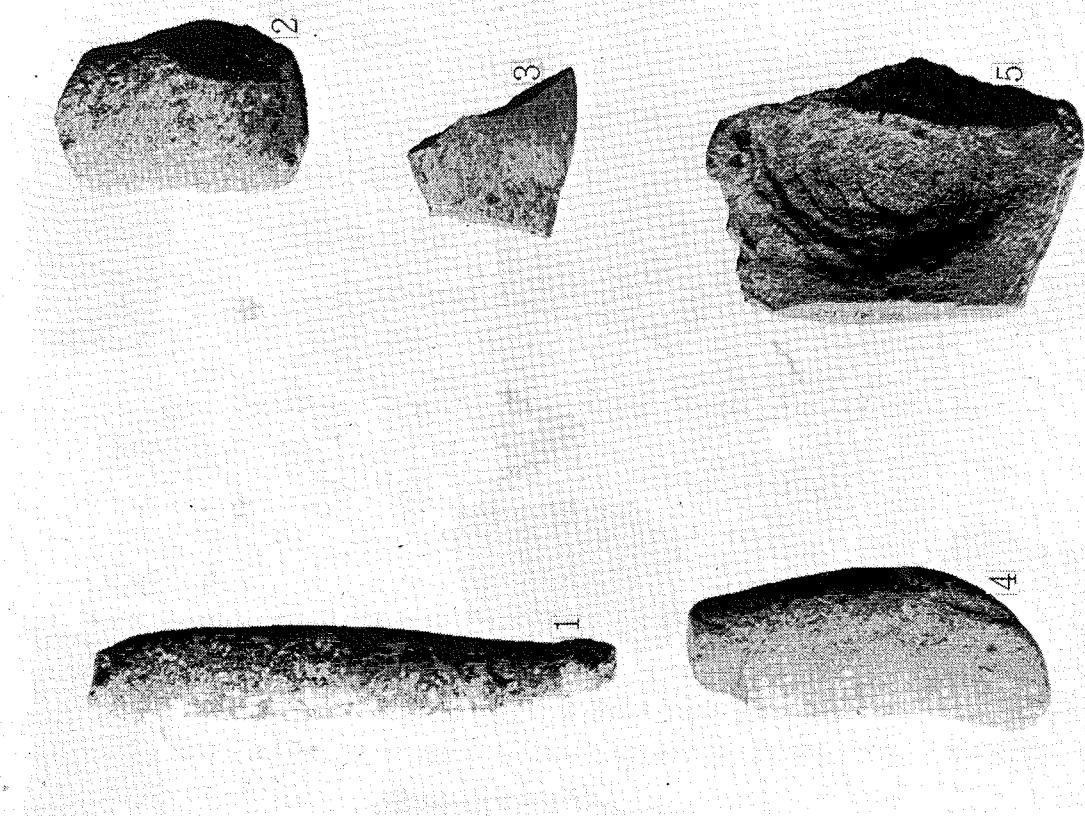
第4図版 伊波貝塚・土器

第3図版 宇佐浜遺跡・石器

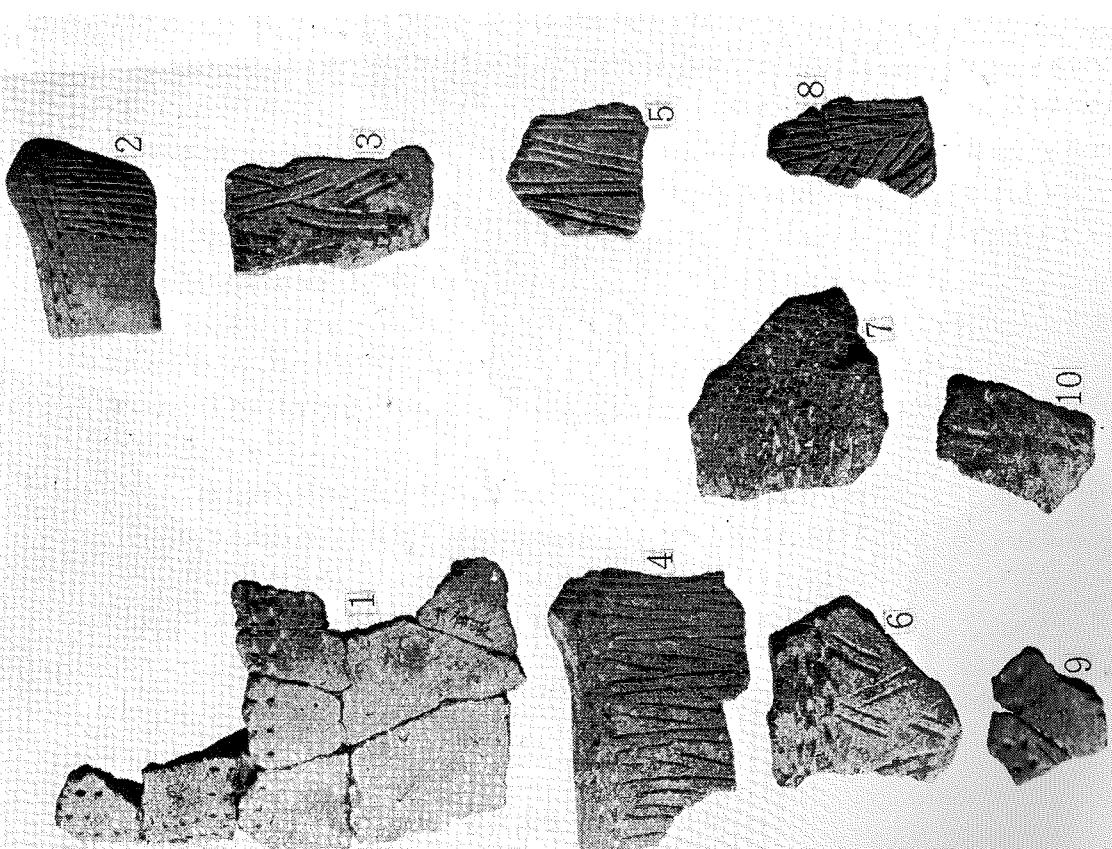


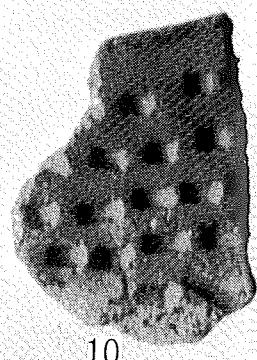
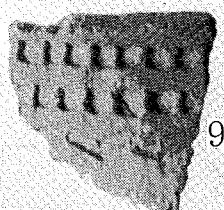
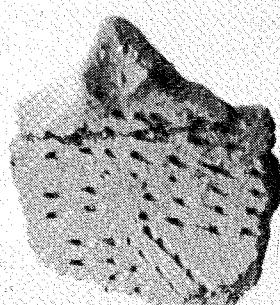
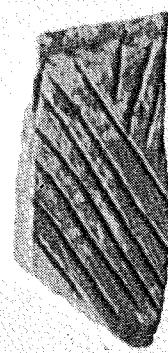
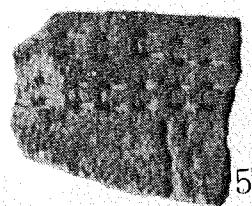
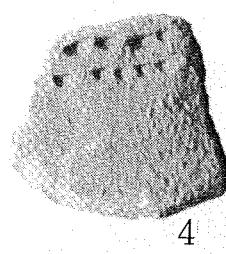
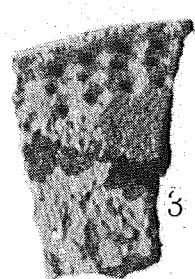
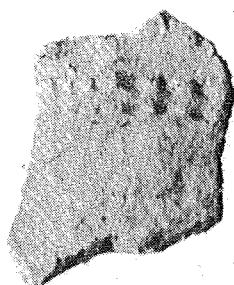
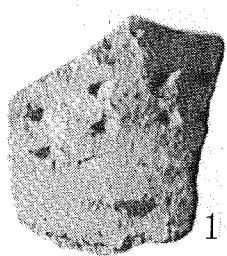


第 8 図版 伊波貝塚・土器



第 7 図版 伊波貝塚・土器





第9図版 平安名貝塚・土器